

P-081 当科における乳房温存療法(BCT)の検討—Biopsy

(WB)+腋窩リンパ節郭清(Ax)の試み
田中喜久 (公立八女総合病院外科)

乳癌手術は、BCTの普及により縮小化されてきた。当科では1991年4月よりBCTを開始したが、1991年11月より断端陽性例を減らすため術前WBを行い、EICの程度を判断し従来の適応基準に加えた。38例を病理全割標本にてシミュレーション(Wide Excision, 約2.0cmのfree margin)を行い、25例(実施BCTは14例)を適応と判断した。適応と判断した症例では断端陽性例は1例も認めなかった。従って1994年4月より局麻WB(free margin 1.0cm)にてEIC(-)~(±)の場合は全麻時Axのみ施行した。現在まで13例行い、断端も全て陰性である。又、観察期間は短い。再発なく乳房の変形が少なく美容上他の術式と比べ優れた結果となった。又、95年よりのWB+Ax症例では14例のうち4例(28.6%)が断端陽性となった。断端の陽性率WB+Axに比し有意に高かった。現在の所、局所再発、遠隔転移もなく生存率では有意の差はみえていない。以上からWBを行いEICの程度を知ることにより従来の適応例より断端陽性例は減少しWB+Axという低侵襲で安全な術式を選択できるが、生存率に寄与できるかは今後の検討が必要と考えられた。

P-083 当科における乳房温存手術の成績

久保田博文、門田奈緒美、田原英樹、河野仁志、永末直文
(島根医科大学第二外科)

1987年4月より1996年12月までの乳癌症例のうち、Tis 5例中1例、Stage I 51例中36例、Stage II 59例中17例、Stage IV 4例中1例の合計55例に対して、乳房温存手術を行った。初期においては全例、術後全乳房照射 50Gy と腫瘍占居部位への 10Gy 照射を行ったが、1994年4月以降の55歳以上の症例11例においては、術後照射は行わなかった。Stage I の9年無再発生存率は温存手術群、非温存手術群で各々86.0%、83.3%であり、両群間に有意差はなかった。Stage II の8年無再発生存率は温存手術群、非温存手術群で各々83.9%、67.8%であり、やはり両群間に有意差はなかった。残存乳房内再発は、Extensive intraductal component (EIC) 陽性15例中1例(6.7%)、EIC 陰性40例中2例(5.0%)の合計3例に認められたが、2例は salvage mastectomy が行われ各々再手術後5年、1年を経過しているが、遠隔転移は認められていない。残りの1例は先行する肺転移の後に、対側乳房も含めた残存乳房内再発をみた例であった。残存乳房内再発例はいずれも閉経前症例であり、これらの症例では厳重な経過観察が必要と考えられた。

P-082 当科における乳房温存療法 100 例の臨床的評価

片岡 健¹⁾、杉 桂二¹⁾、高橋 護¹⁾、春田るみ¹⁾、後藤孝彦¹⁾、杉野圭三¹⁾、土肥雪彦¹⁾、西亀正之²⁾

(¹⁾ 広島大学医学部第2外科¹⁾、同 保健学科²⁾)

当科で1990年2月より開始した乳房温存療法施行例は、1997年現在100例に達した。全例に乳癌告知を行い、その適応は本法を希望され、且つ原則として $t \leq 3.0\text{cm}$ 、 N_{0-1a} 症例とし、主としてwide excision及びLevel IIIまでのリンパ節郭清を行っている。当初は乳房局所切除とリンパ節郭清を別の皮切で行っていたが、最近では特に外側群に対しては美容的または郭清が容易であることから同一皮切で行っている。平均観察期間は50ヶ月で、これまでリンパ節転移1例、肺転移1例の2例に再発を認めている。美容的評価(患者アンケート)として100例中82例から満足の間答が得られた。術後合併症として手術に伴うものではseroma形成が最も多く、特に半年以上遷延し再三の穿刺排液を要したものが6例認められた。それ以外では血腫3例(再手術1例)、術後感染2例、皮膚壊死1例(再手術)であった。また放射線照射による合併症では皮膚炎8例見られ、特に水胞形成3例は照射途中で中止せざるを得なかった。それ以外に重篤な合併症は認めていない。今回、当科における本法でのインフォームド・コンセントの現況と、特に臨床的評価について言及したい。

P-084 当科における乳房温存療法の結果と現状

宮崎道彦、玉木康博、中野芳明、武田 力、若杉英二郎、菰池佳史、中山貴寛、門田雅生、門田守人
大阪大学医学部第二外科

【はじめに】現在、乳房温存療法は乳癌の標準術式の1つになっている。当科の適応は「T'=3cm以下、腫瘍・乳頭間距離=問わない、N'=問わない」としている。advanced STAGEの症例に関しては患者の同意を得た上でneoadjuvant chemotherapyを行ない可能な限り温存している。今回は当科での乳房温存療法の結果と現状を報告する。【対象と方法】大阪大学第二外科で1989年1月1日から1996年12月31日の期間に乳房温存療法を行なった82例について検討した。【結果】平均年齢は46.3歳(24~83歳) 頻度は当初、乳房温存療法の症例はわずかであったが年々増加し、1996年では年間症例の50%を越えていた。STAGEはSTAGE0=2例、I=54、II=21、IIIa=1、IIIb=1、不明・その他=3。組織型はpap=28例、sci=21、solid=22、muc=2、med=1、不明・その他=9。術式はBp+Ax=25例、Bq+Ax=43、Bpのみ=6、Bqのみ=6、その他=2。予後に関しては現在のところ局所再発を認めた症例はなかった。また当科では内視鏡下切除(4例)、側胸部余剰皮下脂肪弁有茎移植による即時再建(17例)を行い良好なcosmetic effectを得ており、その結果も併せて報告する。